

学士院賞を受賞して

福岡 文子

(略) 受賞は五月十八日でございましたので、私と致しましては、当時実感も無く、早速御礼をと存じながらつい失礼致しましたことをあわせて御わび申し上げます。御親しくして頂いておりますクラスの皆様には、私をご理解いただけるものと思い、またおわかり頂きたいので、ここに本心を申し上げますが、学士院賞等、全く、私には過分なもので、受賞の結果も、前にまして、えらくもならず、利巧にもならなかったようでございます。私の好きなシャンソンに je suis comme jesnis ー私は私ーというのがございます。その通りで少しも変りばえがなく、その為に急に癌をなおす薬の発明も出来そうにございませぬ。どうぞお許し下さいまして、以前通りの私として今後も宜しくご指導ご鞭撻をお願い致します次第でございませぬ。ただ嬉しかったことは二十年という歳月により遠く隔てられたお友達が思い出してお便り下さったこととございました。(略) (佐伯栄養学校の同期会、一三会の会報より)



福岡文子お別れ会



2008年3月30日
於 アルカディア市ヶ谷

福岡文子略歴

明治 44 年 7 月 27 日	福岡秀猪・貞子の四女として生まれる
昭和 4 年	女子学習院卒業
昭和 14 年	佐伯栄養学校高等学校卒業
同年	(財) 癌研に勤務
昭和 22 年	学位取得 (北海道大学)
昭和 23 年	「がんの毒素トキソホルモン」を中原和郎氏と共同発見
昭和 34 年	「制がん物質作用機序解析の研究」によりがん研究助成金を受ける
昭和 40 年 5 月	「4-ニトロキノリンの発ガン」により学士院賞を受賞
昭和 47 年	アッシジにて洗礼を受ける。洗礼名はフランチェスカ
昭和 50 年 12 月	国立がんセンター研究所化学療法部長にて退官。名誉研究員。 その後実践女子大学に勤務
昭和 57 年 11 月	勲三等瑞宝章受章
平成 8 年	シルバーヴィラ向山に入居
平成 20 年 3 月 19 日	肺炎にて逝去 (享年 96 歳) 本人の希望にしたがい、横浜市立大学医学部に献体

ガン研究 36 年

福岡 文子

多くの方から、私の退官に関しいろいろな質問やお叱りを受けた。ひとつは、中原総長が 80 に近いお年で、総長と言う重責をはたしながら、やむにやまれぬ研究の炎を燃やし続けておられる姿は誠に見事であり、その方と研究生活をともにしながら、10 年以上も若い者が、定年もないのに研究生活をすてて行くことについてであったと思う。

昭和 14 年秋、当時の癌研の所長・長与又郎博士のお許しと言うかご紹介をいただいたのが、現総長の下での研究の補助員(正式には嘱託の辞令)で、約 36 年の研究生活に入ったのであった。まずさせられたのは、森和雄博士に連れられてのガン患者死体解剖の手伝いであった。したがって、マイクロームの研磨、実験動物の飼育等をしてしながら、ジベレリン(当時、藪田貞次郎博士等により結晶化された)の培養組織に対する作用についての研究テーマが最初の実験であった。昭和 16 年、長与所長は他界された。

その後、発ガンの防禦に関する実験からトキソホルモン-4 ニトロキノリン誘導体の発ガンへと進展したが、ついに開戦となって男子研究員は次々に応召され、女子も勤労奉仕の名目で動員されていった。研究所も疎開を考え出した頃、昭和 20 年 4 月東京大空襲を受けて解散、われわれは理化学研究所に迎えられ、研究を続けることができた。終戦により理研は解散を命じられ、科学研究所となって実質を保った。種々の拘束の中でも成果をあげていたと思う。その一方、ガン研究所は復興もできないという実情であったが、高松宮妃の大いなる助成により復興、癌研究所に帰ったが、わが国初の国立がんセンターができて化学療法部長として迎えられた。

その昔、ガン免疫の仕事はできないものかといって、無知もはなはだしいとお叱りを受け、たたかれた亀のようになったことを覚えているが、われわれは高等菌類の多糖体が移植ガンを抑制することを見出し、その作用は免疫細胞にかかわること、そして今では、ガン免疫による制ガン効果への研究がだれも笑えぬ重要な課題になりつつあることも、昔のことを思い出して感無量である。

(自然 1976 年 3 月号より)